

体育大学における英語教育

— 仙 台 大 学¹⁾ —

田 中 久 子²⁾

1. 緒 言

体育大学においてどのような英語教育を行うのが最善であるかということについての研究はほとんど行われていない。また、体育大学における英語教授法の確立が可能かどうかとも意見のわかれるところである。しかし、英語の授業を行っている以上、最善の教授法を採求することは必要である。本論文は仙台大学において筆者が取り上げた英語教授法とその成果の一部をまとめたものである。

仙台大学は体育学部のみからなる単科大学で、創立昭和42年、学生数約900名、各学年は4クラスで編成されている。英語は必修(演習)8単位、選択(セミナー)2単位で、第1学年4単位、第2学年2単位、第3学年2単位、および第4学年におけるセミナー2単位となっている。

本研究は curriculum and instruction および guidance and counseling の立場に基いて展開し、大別して三つに区分することができる。第一部は準備期間(昭和51年～54年)におけるものであって、その後試行するカリキュラムと教授法に関するいくつかの事項を計画、調査し実施した。第二部(昭和55年～)においては試行されたカリキュラムおよび教授法によって、各々の学生が英語学习上どのような軌跡を描いたかを記録した。この記録の中で数値的に取扱いうるものについては統計的な解析を行った。また数値に示されない学生の変化はレポートや面接によってたしかめる方法をとった。従って筆者が非常勤であった51年をも含めると9年間にわたる記録である。記録した項目は逐次

増加し、後掲の第1図～第3図に示したものが最近のものである。この方式は今後も継続する予定である。第三部は再履習、再々履習の学生に関する追跡調査である。第三部に関する報告は他の機会に譲る。

2. 学習における諸条件

学習とは基本的には個人的な行為であるので、その学習者に最適のカリキュラムと教授法が最大の効果をあげる。

この研究に用いられた teaching method や technique の基盤をなす理論や原理は省略し、こゝでは授業を円滑かつ効果的に進行させるために留意すべきであると考えられているいくつかの具体的事項を記すにとどめる。

Readiness: 学生に学習しようとする心理的準備があるかどうかを調査し、最初は受身の姿勢であっても、とにかく授業を受け入れる心理状態をつくる。group counseling や individual counseling の技法によって学生をよく知り、それによって学生とよい rapport³⁾ をつくるのが効果的である。

Motivation: 動機づけのためには学生の現在の状態からみて達成の可能性のある具体的な目標や、必然性のある目標を立て、これを明確に示し、学生に何が期待されているかを具体的に説明する。学習者は、概して、期待されていることが自分の能力をこえていると感じ、成功の可能性が50%以下であると思うと学習意欲を失ってしまうものであるが、能力の低いものほどこの傾向が強い。

Training: いかなる知識も、技術も理解した

注1) 本研究は昭和51年にはじまり、現在(昭和60年)も継続中のものである。

注2) 専攻は curriculum and instruction と guidance and counseling (共に Minnesota 大学大学院) である。仙台大学における筆者の担当は第3学年およびセミナーである

注3) Rapport とは guidance and counseling の中の用語で counselor と counselee の信頼関係を意味する。

だけでなく、実際に活用できなければならないことを十分説明し納得させる。最初は学生の独走を許さず、伴走者として指導する。

Evaluation: 学習への直接的な動機づけとして成績評価は最も重要な手法である。成績評価の方法は前もって明確に説明しておき、試験は採点の上、迅速に返却する。これは採点に対する責任を負う態度を示すことによって、学生は答案作成に対して責任を問われるということを理解させるに効果的な方法である。評価が数字で表示できないような提出物には評をつけ、学生の努力に対する教師の努力を顕在化することが重要である。提出物は学生との通信であることを意識し、学生に適時に適切に対応することが人数の多いクラスでは特に必要である。テストを数度にわたって行うことは、教授法の修正に有用であり、また再履習となった学生が十分納得してその処置をうけ入れることにもなる。

Discipline: 教室における秩序を保ために、授業中どのような行動をとってはならないかを明示し、これを厳守させることは教師の権限である。授業開始前のオリエンテーションにおいて、教師は個々の学生の学習態度や、授業の進行、クラスとしての秩序の維持について規制力を持ち、また学生は教師の指示に従わねばならないことを説明し、秩序維持のために守るべきルールを明示しておくことが肝要である。

3. 昭和51年度—54年度における試行とその結果

3.1 昭和51年度—53年度

この期間に数多くの試みを行った。それらの計画、実施状況、その成果から判断すると英語教育の4分野（hearing, speaking, reading writing）のすべてを行うことは1年間という時間的制約および、クラス構成人員約60名とその学力の幅の広さから到底不可能であり、学習効果をあげるためにはそのいずれかを捨ねなければならないと考えた。学生がどの領域に弱いか

を確認するために53年度の starting test⁴⁾と、53年度、54年度の入学試験の答案を検討してみた。最も正解度の低いのは長文の内容把握であることが明らかになった。実生活で英語に接する場合は新聞、雑誌、小説、論説などの大意の把握がまず第一である。専門家養成を目的としない、一般的な英語教育の重要な目的は、英語の論理体系を分析し、それを理解することによって得られる知力の養成であるから、英語の授業は知的訓練である。そして英語が手段としての効用をもってはじめて実生活に役立つことができるのである。

外国語の学習法については種々の意見があるが、大人の場合は外国語を読むことが外国語の習得の基本であると考え、Reading が speaking に先行する方が自然であり、その上日本人は話す力よりも、読む力を評価する visual-oriented の性格をもつのである。他方、英文の手紙を書いて、添削をうけ、意外にも簡単に自分を英語で表現できた学生達の喜びを考えると、英作文（和文英訳でない）は表現したい内容をきめるのに考えをまとめなければならないし、効果的なコミュニケーションに持ちこむためにさゝやかなりとも工夫をしなければならないものといえよう。これは思考力、創造性につながっていくものである。バランスよく4分野をのばすことは正論であろうが、本学の現状ではこの4分野にこだわって失うものが多く、得るものが少ないと判断した。読む力と書く力に焦点をあて、読む内容は本学の学生が普通に読んだり、話したりする内容と余りへだたらないことを教材とすること、書くことは自分に関することに限定する方針をたてた。したがって、教材は1/2以上を一人称を主語とするものにしぼり、文法は主として書くことにかゝわりが多く、助けとなるものにしぼった。そして hearing と speaking に関してはさゝやかながら次の配慮を行うことにした。授業の中で行なう training の時に個々の学生に与える

注4) Starting test は第3学年の授業開始時の学生の實力を調査する目的で、その年度の入学試験問題を用いて行なう實力試験である。

簡単な注意や説明を英語で言う。1年に少なくとも1回は外国人を授業に招いて Live English Hour をもつことである。

3.2 昭和54年度

前年度と同じく starting test を行った。Orientation は前年と同様であった。早くよみ内容を把握するという目標に合わせて、教材はすべて1回の授業で1篇又は2篇を読みきれるもの(300~550語)のプリントとした。授業のはじめに配布するので予習はなくなり、復習を学生の責任とした。内容の割合はスポーツ関係4, 一般的読物4, 就職問題2とした。30分テストを、3回の授業に対して1回位行い、必ず次の週に返却し、成績を明らかに示した。このテストの結果は計画の修正に役立った。

成績評価の方法をかえた。

前期成績…前期中の数回の小テストと期末テストの平均

後期成績…後期中の数回の小テストと期末テストの平均

学年成績… $\frac{\text{前期成績} \times 1 + \text{後期成績} \times 1.5}{2.5}$

この計算によると試験点数が前期より後期がよければ単純平均よりよい点数となり、悪ければ単純平均より悪くなる。このような加重平均法をとったのは後期の成績は4月から約10ヶ月間にわたる学習の成果の評価であるということ、前期に失敗しても後期に挽回の機会を設けたということである。最終の成績はこの計算法で得られた成績と数値では表示できない提出物(夏期休暇中の宿題、英作文など)の評価を加えたものとした。この年には夏期休暇中の宿題として、国弘正雄著⁵⁾「サラリーマンの英語」を課した。内容は軽いもので、学生の参考となるような英語学習法が述べられていたので、「この本を読み、あなたの英語の勉強に参考になる点があればそれをあげ、その理由を、参考にならない場合はその理由を述べなさい」とした。この1200字のレポートは53年度に施行したものより結果がよく、学生としての観点からよくま

とめたものが多かったが、反面軽く読み流したものも多く、また通読せずに書いたことが明白なものが全体の1/4に達した。英語の学習について日本語で書いたものを読ませ、英語の学習を励ますという方法を2回試みたがこの方法は有効でないと判断して以後とりやめた。

冬期休暇中の宿題として、次の要領で英作文を課した。題目: My College Life 150~200語, subtitle 自由。このことは4月に授業計画を説明したときに申しわたしてあったこと、また速読の教材の1/2以上をIまたはWeを主語とするものにしておいたためか、難しいことを書く力のないことが幸して、短文のよせ集めながら、最初にしては良くできていて、読んで楽しく、添削の苦勞も幾分軽く感じられた。またこれによって学生との心理的距離が非常に近づいた感じがした。英作文の中のまちがいのままかな分類を表にしてみたところ、日本語と英語の文の構成、すなわち語順の相異を理解していない学生が多いことが明らかになったので、次年度は文法の焦点を日本文と英文の相異点にしぼる方針とした。

この年度には、教員採用試験の合格をめざす学生の自主ゼミがあり、そのメンバーが、各クラス、各クラブに都合よく所属していたので英語の授業のモニターを依頼した。その報告によって学生側の受け止め方がはっきりし、それまで手さぐりの状態で推量にすぎなかった点をつめることができた。これによってこれまでの準備期間を一応終了し、略案ではあるが55年以降に試行するカリキュラムと教授法をまとめることができた。モニターの報告によると授業の目標を明確にし、年間計画を知らせることはよい効果をもたらした。学生は最初は反対していた実力テストをうけ入れ、テストは知識の応用能力を測定することであることをよく理解していた。そして、記憶よりも思考力と理解力を問われ、学習したことの応用を求めるテストに対して、さまざまなスタイルで対応していることがわかった。評価は学生にとって重要な意味をも

注5) 国弘正雄著「サラリーマンの英語」実業之日本社(昭和58年)

ち、単位の取得をある程度困難にすることは十分な動機づけとなり、学生は評価のやり方に対応するためにそれなりに努力しているのであった。しかしそれが数字として明確に現れない状態なのであって、授業の成果をあげることを急ぎがちなことをいましめられた感じであった。

答案を採点して、速やかに返却することは学生の姿勢を正すのに役に立っていること、添削とコメントを歓迎していること、日本文中の誤字の訂正を感謝していることなどが報告された。欠席を防ぐには授業の密度を濃くして欠席によるマイナスを大きくすることも提案された。カンニングを防ぐには答案を成績順にかえすという提案は意外であったが、カンニングによって獲得したよい点数を公開されることはきびしい処置に相当することはいなづけた。教師の要求が学生の負担の限度をこえることを危惧していたが、学生達に刺戟を与えるにはプレッシャーを強くするのが効果的であるというのがモニターの見解であった。モニター達の成績はさまざまであったが、提案を試行することに協力的で、自己中心的でない態度には感心した。

各年度に行った授業その他は上記のようであったが、さまざまな試行の中で効果があると判断したものは、その後もくりかえし、定着している。試行が失敗におわった場合は次年度に条件をかえて再度試行し、同じ結果に終わったものは断念した。

4. 昭和55年度～59年度における授業とその結果

4.1 カリキュラムの編成

目標：辞書を使用して英文の大意をつかみ、自分の述べたいことを口語体の英文で書くことができる。将来必要に応じて、学習する意志と能力を持つ。そのための独学を可能にする程度の基礎知識とそれを運用するための技能を学ぶ。

内容：主として書くために必要な文法と大意把握のための英文の読み方。

教材：文法の重点的練習問題および読解力養成のための読みもの、内容は、運動関係のもの、

の、一般の文章、就職問題、諺、詩など。

方法：知識の伝達に効果的である講義形式により文法の理論的説明を行う。練習はプリントを用い、説明後すぐ自主学習をはじめ、巡回して指導し、数人が同じあやまりをしている場合はそれについて全員に説明する。これをくりかえし、1/2位が終了した時に解答と説明を与えまとめる。読解の練習は最初に warming up用の簡単なものを、時間を制限して予習させる。文法と同じくまとめる。次にレベルのやや高いもの（英文の難度の高いもの、語数の多いもの、内容が抽象的なものなど）を与えるが、時間内に終了しない場合が多い。その際は、最初の部分（大体全体の1/5位）を説明して手がかりを与え、残余部分を宿題とする。読解力養成を集中的に行う後期のはじめにおいて、宿題として予習を課したものを次週に回収し、予習度を調査したり問題を与えてテストをすることを2—3回くりかえして予習率を上げる努力をする。

読解の学習は声を出して読むことをきびしく指導し、必ず1回目は声を出し、自分にきかせながら読ませる。自主学習中に助言を求める者は挙手で合図をさせる。また問題を終了次第挙手させ、全問題を正しく解答できたものには他の学生の指導に当らせる。この状態になると教室は buzz session に入り、独りでやる者、説明をうける者、相談し合う者となる。機をみて解答し、説明する。

英作文の指導は先ず5月に先輩の書いた My College Life をわたしはじめ、11月末までに約6篇を読ませることによって、要求されている文章および内容の水準を示す。積極的な学生が追加を希望する場合は2篇を限度としてわたし。英文の書き方の指導を個別化するために次の方法をとる。夏休み前に手紙又は履歴書の形式を教え、形式を厳守した英文の書き方による提出物を宿題とする。提出されたものは添削し、提出順にかえす。評価がAのものとDのものをいくつかえらび、授業毎に本人に板書させておき、説明しながら添削し、訂正や表現の仕

方を全員に理解させる。10月、11月にわたり、毎授業においてクラスが自主学習をしている間にこの提出物に関して一人一人面接し、説明をきいたり、きかせたりする。この進行は1回平均6～7人終了するようにする。

特別授業として、外国人を招く Live English Hour を設ける。カリキュラムを読み書きにしぼったので、聞くこと、話すことへの興味を維持するため年1回外国人を招き、60分の speech (講師の母国や自分自身について) があり、その後 free talking を行う。

自主学習の時に学生と話す簡単なことは英語を用いて、英語で応待しようとする試みを忘れさせないように努力する。

4.2 評価の方法

A. 試験：一学習したことに重点をおく実力テストである。数回のテストがあるので再試験は行わず、他の試験の結果を使って評価する。試験の種類は次のようである。

1. Starting test：第1回の授業において、その年の入学試験問題を課し、現状の確認とするが、この点数は第3学年の成績には入れない。

2. 学期末テスト：前期と後期の2回

3. 進度テスト：大体3回の授業に対し1回で、年間4回位である。

4. 予習テスト：後期はじめに予習として課したものを次週に、それに関する問題によってテストするもの、1回。

5. Closing test：その学年の入学時の入学試験を用いる。これは学年成績の対象にはしない。

B. 提出物：一

1. 夏季休暇宿題：英文のハガキ1枚の近況報告又は英文履歴書。

2. 英作文：My College Life 150～250語、12月中旬に提出。

3. 提案：日本語、「次年度の授業の効果をあげるための提案」、800字～1200字、2月末日提出。

4.3 授業の状況

昭和55年～59年はほぼ上記のカリキュラムに

従って行ったが、学生の状態に対応していくため各学年全く同じではない。毎年教材の1/3を新らしくするので難易度、語数、形式などがやゝ変化している。例えば56年度には日本政府からユネスコ本部に提出された日本の中学、高校の体育指導要領の英訳の一部を使用した。英文から判断すると体育専門家の監修を経ていないように考えられるため継続使用しなかった。学生のレベルの判定のために用いるある程度レベルのそろった教材としては、英語検定2級の二次試験問題の数種を用いた。速読の教材は高校1年程度からはじまり、やがて大学入試問題をも用いた。他大学の使用中の教科書、アメリカの雑誌や教科書、ボーイスカウトの指導書、英文の百科辞典やスポーツ辞典などからも採用している。

Live English Hour については55年アメリカ人(大学教授)、56年アメリカ人夫婦(留学生)、57年コスタリカ人(留学生)、58、59年にはバングラデシュ人に依頼した。知人でない場合は事前に英語の発音と品格を調査した。英語が外国語であるという点で学生と共通の立場にあり、短期間の学習で正確な、美しい日本語を話すことができるという点からみて、英語を母国語としない、日本在住2年位の留学生が、学生に最もよい刺戟となるように思われる。

読書力養成が集中的に行われる後期のはじめに、予習として配布したものを次週に回収し、予習度を調査するとクラスによっては第1回は0.5～10%位のものもある。予習度を発表しておく。次には予習として配布したものに関する質問の問題を与えて短時間(15分位)のテストを行い、その結果を採点発表する。これは予習テスト成績として成績に加える。これを3回行った学年でも予習率は57%をこえることがなかった。第1回の調査で47%の高率を示したクラスでも70%をこえることはなかった。

"Sports in American Universities" は予習率が最も高い教材であった。毎年度使用したが他の教材より予習率が常に高いという結果が出た。"Traffic Accident", "How to Drink",

Dating", *"American Foot-ball"*, *"Skiing in America and Japan"*, *"Borrowing Money"*, *"Violence"* などが予習率が高いのを見ると学生は題目又は内容に関心のあるものを選択予習する傾向がある。

論文形式(英文ハガキ, 英作文, 提案)は基準を一定にするのが困難なため, 評価に対する学生の信頼度が得がたい。提出物全体をざつとよみ, 一般的水準をきめ, 基準として示すことのできるものを A, B, C, D の代表として 2 篇づゝ用意し, 学生に示す方法をとった。授業の密度が濃く, 進行が早まるにつれて, 欠席をさけるため所属外のクラスでの受講や, 理解できないため再聴講を希望する学生がいる。57年度から make-up 方式をとり入れた。これは臨時の他組履習で, 欠席が予定される場合, 前もつて許可を得て他組に出席受講する。

指導者のついた自主学習は training である。知的作業の訓練を律する原理は運動の訓練の原理と共通するところがある。記録更新のために工夫をこらし, 長年にわたる訓練に耐えてきた学生は training の価値を体得している。しかし, 受動的学習に余りにも馴れすぎ, 授業における自分の責任事項の自覚が少ないので, 学習態度のきりかえにはかなりの時間を要し, 1年の大半が過ぎてしまうのである。教室内のモラルは向上し, 授業も大体として支障なく行われたが, 積極的な学習態度はなほ教室内に止まったということである。

5. 成績の解析および結果⁶⁾

5.1 解析方法

先に記した数値で表示できる試験成績を整理し, 解析し, データ相互の, また関連するデータとの間の相関関係などを調べるために, コンピュータプログラムを作成した。本研究期間中に対象項目が逐次増加し, 現在は, 入学試験(ENTR), 第3学年における starting test(3-EB), 前期試験(3-F), 後期試験(3-S), closing test(3-EE)の試験成績が対象項

目になっている。コンピュータには, これらに加えて, 学籍番号(RG-NO), 高等学校調査書中の全科目評定値(HSR), 同英語評定値(HSRE)および第3学年にける欠席数(ABSE)を入力した。前期成績と後期成績の単純平均(AVFS), 加重平均(WAVFS), 進歩率(S/F)の各学生についての計算および加重平均に基づく成績順位(ORD)の判定はコンピュータが行う。加重平均(WAVFS)の計算には $WAVFS = [(3-F) + (3-S) \times 1.5] / 2.5$ を用いている。また進歩率(S/F)は後期成績(3-S)を前期成績(3-F)で除した値であり, 同一学年における学生の進歩を相対的に示す値と考えてよい。さらに HSR, HSRE, ENTR, 3-EB, 3-F, 3-S, 3-EE, AVFS, WAVFS, S/F, ABSE の平均値(MEAN)と標準偏差値(DEVIATION)を, とりあげたグループについて計算する。いずれも, コンピュータ画面に表示し, 必要があればプリントできるようプログラムを作成してある。各クラス, あるいは学年について, 試験入学の学生グループ(Eで表示)と推薦入学の学生グループ(Rで表示)を区分して解析できるように工夫した。典型的な一例を第1図~第3図に示す。第1図はクラス全員, 第2図は試験入学のグループ, 第3図は推薦入学のグループのデータで, 順序不同とし, 学籍番号の表示を除いてある。これらに使われている略語を第1表に一括記載した。

平均値, 標準偏差値に加えて, 各項目間の相関関係を検討した。今回取り上げた関係は
(i) HSR vs. ENTR, (ii) HSRE vs. ENTR,
(iii) ENTR vs. 3-EB, (iv) ENTR vs. 3-F
(v) ENTR vs. 3-S, (vi) HSR vs. WAVFS
(vii) HSRE vs. WAVFS, (viii) ENTR vs.
WAVFS, (ix) ENTR vs. 3-EE, (x) 3-EB
vs. WAVFS, (xi) 3-EE vs. WAVFS, (xii)
S/F vs. ABSE

で, 各学年, 各クラス, 各グループのそれぞれについて要求する関係の回帰直線, 相関係数, 相関図が得られるようプログラムを作成した。

注6) 数値の計算と解析は東北大学名誉教授田中信行博士の御協力によるものである。

*** LIST OF RECORDS ***

NO	RG-NO	HSR	HSRE	ENTR	3-EB	3-F	3-S	3-EE	AVFS	S/F	WAVFS	ORD	ABSE
1	---	4.1	4.0	--	34	47	73	60	60.0	1.55	62.6	30	2
2	---	3.6	3.3	56	35	40	58	50	49.0	1.45	50.8	42	2
3	---	4.4	3.6	--	33	66	60	37	63.0	0.91	62.4	31	4
4	---	3.2	3.0	59	47	57	81	73	69.0	1.42	71.4	19	6
5	---	3.0	3.3	57	53	69	65	64	67.0	0.94	66.6	27	4
6	---	3.8	3.7	--	32	60	51	57	55.5	0.85	54.6	40	5
7	---	3.9	3.3	--	32	50	63	64	56.5	1.26	57.8	38	3
8	---	3.1	3.0	70	45	56	75	61	65.5	1.34	67.4	24	1
9	---	3.9	4.0	--	43	48	90	71	69.0	1.88	73.2	17	2
10	---	3.4	3.0	67	55	60	65	81	62.5	1.08	63.0	28	3
11	---	3.1	3.0	--	35	47	80	65	63.5	1.70	66.8	26	6
12	---	3.2	3.0	64	34	80	84	65	82.0	1.05	82.4	6	3
13	---	3.9	4.3	64	69	87	85	62	86.0	0.98	85.8	5	1
14	---	4.5	4.0	--	44	55	53	60	54.0	0.96	53.8	41	2
15	---	3.2	3.0	77	54	88	90	67	89.0	1.02	89.2	2	2
16	---	3.9	4.0	--	60	74	75	52	74.5	1.01	74.6	15	0
17	---	4.2	2.0	--	19	40	85	60	62.5	2.13	67.0	25	0
18	---	3.6	3.0	58	47	75	78	66	76.5	1.04	76.8	12	1
19	---	3.7	3.0	--	42	20	70	52	45.0	3.50	50.0	43	1
20	---	3.4	4.7	88	63	80	95	91	87.5	1.19	89.0	3	4
21	---	4.4	4.3	--	51	70	74	66	72.0	1.06	72.4	18	0
22	---	3.1	2.3	60	36	62	73	67	67.5	1.18	68.6	22	1
23	---	3.4	3.0	--	34	54	63	46	58.5	1.17	59.4	36	1
24	---	4.4	4.0	--	15	62	75	43	68.5	1.21	69.8	21	0
25	---	4.3	4.0	--	58	87	92	73	89.5	1.06	90.0	1	0
26	---	4.0	3.7	66	40	78	78	55	78.0	1.00	78.0	11	0
27	---	4.2	2.0	--	29	50	68	65	59.0	1.36	60.8	34	3
28	---	3.2	3.0	--	50	40	41	62	40.5	1.03	40.6	49	4
29	---	3.5	4.0	58	53	73	75	57	74.0	1.03	74.2	16	0
30	---	3.1	2.3	73	52	70	78	66	74.0	1.11	74.8	14	1
31	---	4.4	4.3	--	58	85	78	72	81.5	0.92	80.8	9	0
32	---	3.8	4.0	55	25	29	35	44	32.0	1.21	32.6	50	5
33	---	3.7	3.7	72	57	47	83	62	65.0	1.77	68.6	22	1
34	---	3.6	2.7	--	29	49	70	47	59.5	1.43	61.6	33	0
35	---	3.3	2.0	--	29	47	60	48	53.5	1.28	54.8	39	4
36	---	3.4	3.0	--	36	32	60	37	46.0	1.88	48.8	45	5
37	---	3.6	3.0	64	35	43	75	38	59.0	1.74	62.2	32	0
38	---	3.8	3.3	--	75	76	83	73	79.5	1.09	80.2	10	0
39	---	3.3	3.0	57	53	47	45	74	46.0	0.96	45.8	46	1
40	---	3.3	2.7	--	29	34	78	44	56.0	2.29	60.4	35	2
41	---	4.3	4.3	--	14	40	70	39	55.0	1.75	58.0	37	3
42	---	3.8	3.0	--	46	87	70	57	78.5	0.80	76.8	12	2
43	---	3.7	3.0	70	63	75	86	52	80.5	1.15	81.6	8	1
44	---	3.8	3.5	61	19	50	36	79	43.0	0.72	41.6	48	7
45	---	3.1	2.8	63	43	30	63	64	46.5	2.10	49.8	44	1
46	---	3.1	2.0	63	48	69	30	57	49.5	0.43	45.6	47	7
47	---	3.3	3.8	65	41	64	75	71	69.5	1.17	70.6	20	1
48	---	3.0	3.0	--	49	74	95	68	84.5	1.28	86.6	4	5
49	---	3.9	3.3	--	37	45	75	60	60.0	1.67	63.0	28	2
50	---	3.0	2.3	71	41	77	85	71	81.0	1.10	81.8	7	1

MEAN		3.6	3.3	64.9	42.4	58.9	70.9	60.3	64.9	1.30	66.1		2.2
DEVIATION		0.4	0.7	7.6	13.5	17.4	15.1	11.8	13.8	0.49	13.7		2.0

第1図 クラス全員の成績記録 (学籍番号は --- を出力)

1982年試験入学のグループに関する2例を第4図および第5図に示した。第4図は1%有意水準で相関があると言える例、第5図は相関があるといえない(1%有意水準で)例である。いずれも、コンピュータディスプレイの画面のコピーで、ディスプレイ上では相関図の丸は赤色で表示されている。

第3学年の成績(WAVFS)の分布を概観で

きるよう、ヒストグラムのプログラムを作成した。第6図はその一例である。推薦グループの分布が点の低い方に片寄っていることがわかる。

5.2 解析結果

5.2.1 平均値、標準偏差による検討

1977年入学から1982年入学までの各学年全員、試験グループ、推薦グループについて各項

*** LIST OF RECORDS ***

NO	RG-NO	HSR	HSRE	ENTR	3-EB	3-F	3-S	3-EE	AVFS	S/F	WAVFS	ORD	ABSE
1	---	3.6	3.3	56	35	40	58	50	49.0	1.45	50.8	19	2
2	---	3.2	3.0	59	47	57	81	73	69.0	1.42	71.4	11	6
3	---	3.0	3.3	57	53	69	65	64	67.0	0.94	66.6	16	4
4	---	3.1	3.0	70	45	56	75	61	65.5	1.34	67.4	15	1
5	---	3.4	3.0	67	55	60	65	81	62.5	1.08	63.0	17	3
6	---	3.2	3.0	64	34	80	84	65	82.0	1.05	82.4	4	3
7	---	3.9	4.3	64	69	87	85	62	86.0	0.98	85.8	3	1
8	---	3.2	3.0	77	54	88	90	67	89.0	1.02	89.2	1	2
9	---	3.6	3.0	58	47	75	78	66	76.5	1.04	76.8	8	1
10	---	3.4	4.7	88	63	80	95	91	87.5	1.19	89.0	2	4
11	---	3.1	2.3	60	36	62	73	67	67.5	1.18	68.6	13	1
12	---	4.0	3.7	66	40	78	78	55	78.0	1.00	78.0	7	0
13	---	3.5	4.0	58	53	73	75	57	74.0	1.03	74.2	10	0
14	---	3.1	2.3	73	52	70	78	66	74.0	1.11	74.8	9	1
15	---	3.8	4.0	55	25	29	35	44	32.0	1.21	32.6	24	5
16	---	3.7	3.7	72	57	47	83	62	65.0	1.77	68.6	13	1
17	---	3.6	3.0	64	35	43	75	38	59.0	1.74	62.2	18	0
18	---	3.3	3.0	57	53	47	45	74	46.0	0.96	45.8	21	1
19	---	3.7	3.0	70	63	75	86	52	80.5	1.15	81.6	6	1
20	---	3.8	3.5	61	19	50	36	79	43.0	0.72	41.6	23	7
21	---	3.1	2.8	63	43	30	63	64	46.5	2.10	49.8	20	1
22	---	3.1	2.0	63	48	69	30	57	49.5	0.43	45.6	22	7
23	---	3.3	3.8	65	41	64	75	71	69.5	1.17	70.6	12	1
24	---	3.0	2.3	71	41	77	85	71	81.0	1.10	81.8	5	1

MEAN		3.4	3.2	64.9	46.2	62.8	70.5	64.0	66.6	1.17	67.4		2.3
DEVIATION		0.3	0.6	7.6	11.7	16.7	17.5	11.5	15.2	0.34	15.4		2.1

第2図 第1図と同一クラスの試験入学者の成績記録 (学籍番号は --- を出力)

*** LIST OF RECORDS ***

NO	RG-NO	HSR	HSRE	ENTR	3-EB	3-F	3-S	3-EE	AVFS	S/F	WAVFS	ORD	ABSE
1	---	4.1	4.0	--	34	47	73	60	60.0	1.55	62.6	13	2
2	---	4.4	3.6	--	33	66	60	37	63.0	0.91	62.4	14	4
3	---	3.8	3.7	--	32	60	51	57	55.5	0.85	54.6	22	5
4	---	3.9	3.3	--	32	50	63	64	56.5	1.26	57.8	20	3
5	---	3.9	4.0	--	43	48	90	71	69.0	1.88	73.2	7	2
6	---	3.1	3.0	--	35	47	80	65	63.5	1.70	66.8	11	6
7	---	4.5	4.0	--	44	55	53	60	54.0	0.96	53.8	23	2
8	---	3.9	4.0	--	60	74	75	52	74.5	1.01	74.6	6	0
9	---	4.2	2.0	--	19	40	85	60	62.5	2.13	67.0	10	0
10	---	3.7	3.0	--	42	20	70	52	45.0	3.50	50.0	24	1
11	---	4.4	4.3	--	51	70	74	66	72.0	1.06	72.4	8	0
12	---	3.4	3.0	--	34	54	63	46	58.5	1.17	59.4	18	1
13	---	4.4	4.0	--	15	62	75	43	68.5	1.21	69.8	9	0
14	---	4.3	4.0	--	58	87	92	73	89.5	1.06	90.0	1	0
15	---	4.2	2.0	--	29	50	68	65	59.0	1.36	60.8	16	3
16	---	3.2	3.0	--	50	40	41	62	40.5	1.03	40.6	26	4
17	---	4.4	4.3	--	58	85	78	72	81.5	0.92	80.8	3	0
18	---	3.6	2.7	--	29	49	70	47	59.5	1.43	61.6	15	0
19	---	3.3	2.0	--	29	47	60	48	53.5	1.28	54.8	21	4
20	---	3.4	3.0	--	36	32	60	37	46.0	1.88	48.8	25	5
21	---	3.8	3.3	--	75	76	83	73	79.5	1.09	80.2	4	0
22	---	3.3	2.7	--	29	34	78	44	56.0	2.29	60.4	17	2
23	---	4.3	4.3	--	14	40	70	39	55.0	1.75	58.0	19	3
24	---	3.8	3.0	--	46	87	70	57	78.5	0.80	76.8	5	2
25	---	3.0	3.0	--	49	74	95	68	84.5	1.28	86.6	2	5
26	---	3.9	3.3	--	37	45	75	60	60.0	1.67	63.0	12	2

MEAN		3.9	3.3	--	39.0	55.3	71.2	56.8	63.3	1.42	64.9		2.2
DEVIATION		0.4	0.7	--	14.1	17.3	12.5	11.1	12.2	0.57	11.7		1.9

第3図 第1図と同一クラスの推薦入学者の成績記録 (学籍番号は --- を出力)

表1表 略語およびその説明

略 語	説 明
ABSE	Absence, 欠席回数
AVFS	Average of records at the first and the second semester, 前期成績と後期成績の平均
DEVIATION	Standard deviation, 標準偏差
3-EB	Starting test, 前期授業最初に行う試験
3-EE	Closing test, 学年最後に行う試験
ENTR	Entrance examination, 入学試験
3-F	Records at the first semester, 前期成績
HSR	High school report, 高等学校調査書の全科目評定値
HSRE	High school report on English, 高等学校調査書の英語評定値
MEAN	Mean, 平均値
NO	Number, 行番号
ORD	Order, 順位 (WAVFS に基づく順位)
RG-NO	Registered number, 学籍番号
3-S	Records at the second semester, 後期成績
S/F	Ratio of 3-S to 3-F, 進歩率
WAVFS	Weight average of records at the first and the second semester, 前期成績と後期成績の加重平均

(アルファベット順)

YEAR 1982 CLASS (E) CORRELATION: ENTR vs. WAVFS

NUMBER OF DATA SETS: 111 WAVFS

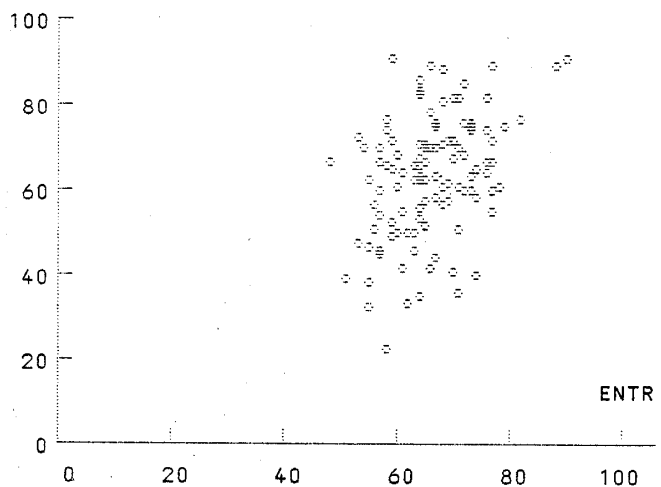
RECURSIVE LINEAR EQUATION:

$$WAVFS = 21.18 + .64 ENTR$$

CORRELATION COEFFICIENT = .3596

$$R(109, 0.01) = .2434$$

Do you want to prepare correlation diagram (Y/N)? Y



Do you want to continue or end (C/E)?

第4図 ENTR vs. WAVFS の相関関係 — 回帰直線, 相関係数および相関図

YEAR 1982 CLASS (E) CORRELATION: HSRE vs. WAVFS

NUMBER OF DATA SETS: 111

WAVFS

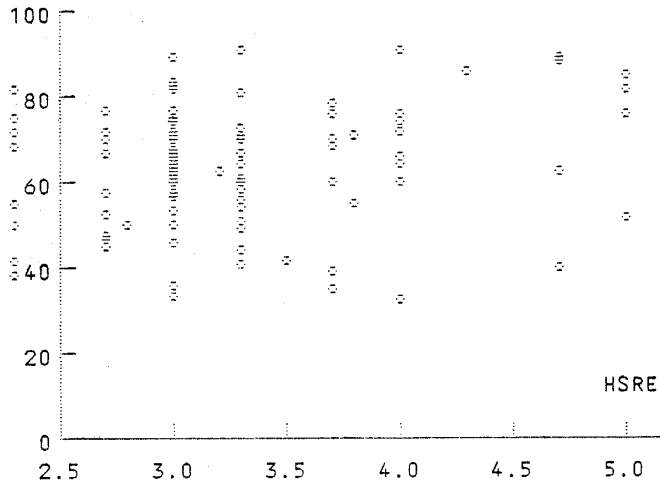
RECURSIVE LINEAR EQUATION:

$$WAVFS = 52.88 + 3.28 HSRE$$

CORRELATION COEFFICIENT = .1551

R(109 , 0.01) = .2434

Do you want to prepare correlation diagram (Y/N)? Y



Do you want to continue or end (C/E)?

第5図 HSRE vs. WAVFS の相関関係 —— 回帰直線, 相関係数および相関図

目の平均値を示したのが第2表である。これらをクラス別に分け、24クラスについて求めた平均値を示したのが第3表～第5表である。いずれの表においても、正規の年限で第3学年に進学できなかった学生および第3学年の前期あるいは後期の試験または両者を受験しないため成績が記入されなかった学生は除いてある。

第1表～第4表のデータならびにこゝには表示しなかった標準偏差によりいくつかの事項が明らかとなった。

(1) 高等学校調査書の評定は全科目 (HSR)、英語 (HSRE) とともに、いずれの年度でも試験グループより推薦グループの方が高い。この傾向は各クラスに分けて比較しても同様であり、HSR は1クラスで等しく、23クラスで推薦グループが高い。HSRE は16クラスのデータしかないが、2クラスで等しく、14クラスは推薦グループが高い。いずれについても、試験グループが推薦グループより高いクラスは0である。

他方、第3学年の成績を WAVFS で比較するといずれの年度も試験グループの方が遙かによい成績を示している。試験グループを1とし

たときの比率は最高で0.90 (1982年)、最低は0.81 (1978年) である。これはクラスに分けてみてもいえることで、全クラスとも推薦グループの WAVFS は試験グループの WAVFS より低い。最も差が大きいのは0.743、最も近いものでも0.963である。0.7台が6クラス、0.8台が14クラスに対して0.9台は4クラスに過ぎない。これらの第3学年の成績からみて、高等学校調査書の評定は推薦入学者に関する限り、かなり割引いてみる必要がある。

(2) 試験グループについて入学試験成績 (ENTR) と第3学年の starting sest の成績 (3-EB) を比較すると、常に3-EBの方が低い。3-EBの ENTR に対する比 (3-EB/ENTR) でみると、24クラスの中最高は0.97、最低は0.71、0.7台6クラス、0.8台15クラス、0.9台3クラスである。このことは注目値する。同じ問題ではないから正確な比較はできないが、もし問題が異なるのが原因であるなら、3-EB が低い値を示す確率は50%の筈である。全24クラスについて3-EB が低い値である原因を問題の異なることに帰することは不可能で

*** DISTRIBUTION OF WAVFS ***

YEAR REGISTERED: 1982 ALL CLASSES

Students through Examination

100 - 90	**
89.9 - 80	*****
79.9 - 70	*****
69.9 - 60	*****
59.9 - 50	*****
49.9 - 40	*****
39.9 - 30	*****
29.9 - 20	*
19.9 - 10	
9.9 - 0	

Students by Recommendation

100 - 90	*
89.9 - 80	*****
79.9 - 70	*****
69.9 - 60	*****
59.9 - 50	*****
49.9 - 40	*****
39.9 - 30	*****
29.9 - 20	*
19.9 - 10	*
9.9 - 0	

第6図 WAVFS のヒストグラム — 試験入学グループと推薦入学グループの比較

ある、今後の検討課題であろう。

(3) 進歩率(S/F), すなわち、後期成績の前期成績に対する比も興味がある。後期試験の方が難度を高めるのが通常であるから、S/F = 1でもある程度の進歩をしていると考えてよい。学年別では一学年の全員の平均が1以下を示した学年は一つもない。6年間の24クラスのデータを見ると、クラス全員のS/Fが1以下を示したものは3クラスに過ぎない。最高は2.00, 1.00~1.29が9クラス, 1.30~1.59が4クラス, 1.60~2.00が8クラスである。進歩率も試験グループと推薦グループの比較は興味がある。それぞれのクラスについて、両グループの進歩率を比較すると、試験グループの進歩率が高いのは24クラス中3クラスだけである。1979年以

降入学の16クラスについては全クラス推薦グループの方が高い進歩率を示している。推薦グループの進歩率の最高値は2.49という驚くべき高い値である。これほどの進歩率を示しながら、なお、第3学年の通年成績(WAVFS)は常に推薦グループの方が低い。考慮の必要がある。

5.2.2 回帰直線, 相関係数による検討

先に記したように、諸種のグループについて12の関係に関し、回帰直線, 相関係数を求め、必要があれば相関図を描かせて、相関の有無を調べた。これについての詳細は改めて報告することとし、こゝでは、注目すべき一、二の点を記すにとどめよう。

(1) 試験グループについては高等学校調査書の評定(HSR および HSRE) と入学試験成績

第2表 学年別成績記録 (平均値)

入学 年度	グ ル ー プ	学 生 数	HSR	HSRE	ENTR	3-EB	3-F	3-S	3-EE	AVFS	S/F	WAVFS	ABSE
1977	全員	176	3.5			43.0	50.6	62.7		56.6	1.30	57.9	3.4
	試験	82	3.3		53.3	46.1	56.4	67.7		62.1	1.23	63.2	3.4
	推薦	94	3.6			40.1	45.5	58.4		51.9	1.35	53.2	3.5
1978	全員	201	3.5			45.6	63.2	65.6		64.4	1.07	64.6	2.6
	試験	96	3.4		51.5	47.4	68.5	70.3		69.4	1.05	69.6	2.6
	推薦	105	3.7			43.9	58.3	61.3		59.8	1.10	60.1	2.5
1979	全員	215	3.5	3.2		50.4	46.1	67.1		56.6	1.71	58.7	3.2
	試験	105	3.4	3.1	66.9	55.1	55.0	71.6		63.3	1.48	65.0	3.4
	推薦	110	3.6	3.3		45.8	37.5	62.9		50.2	1.94	52.7	2.9
1980	全員	220	3.5	3.3		48.8	44.8	68.7		56.7	1.72	59.1	2.0
	試験	118	3.4	3.1	62.9	53.2	51.5	73.4		62.5	1.56	64.7	1.9
	推薦	102	3.7	3.4		43.5	37.0	63.1		50.1	1.90	52.7	2.2
1981	全員	212	3.6	3.3		46.8	56.9	52.8		54.8	1.02	54.4	2.3
	試験	129	3.4	3.1	59.3	50.2	62.2	56.2		59.2	0.95	58.6	2.3
	推薦	83	3.8	3.5		41.5	48.6	47.4		48.0	1.13	47.9	2.3
1982	全員	206	3.6	3.3		44.6	55.6	63.8	60.8	59.7	1.28	60.5	2.7
	試験	111	3.4	3.2	65.7	49.8	60.5	65.4	65.2	62.9	1.14	63.4	2.6
	推薦	95	3.8	3.5		38.4	50.0	61.9	55.6	55.9	1.44	57.1	2.8

(ENTR) および第3学年成績 (WAVFS) の関係、推薦グループについては HSR および HSRE と WAVFS の関係を調べたが、いずれもほとんど相関関係がない。HSR には英語以外の科目も含まれているので相関関係のないのが当然であるが、英語の評定 (HSRE) についても相関関係があるといえる (1%有意水準で) ものはほとんどない。調査書を作成する高等学校が1校でないから考えられないことではないが、極端な例としては逆相関があるといえそうな (1%有意水準ではいえないが、相関係数はかなり大きな負の値 -0.3462 を示し、回帰直線、相関図ともに HSRE が大きいと WAVFS

が小さいくなる傾向を示す) ものもある。

(2) 入学試験成績 (ENTR) と第3学年成績 (WAVFS) の関係も興味がある。学年単位では、6学年いずれの学年も、1%有意水準で相関関係があることを示している。(第6表参照) この結果は、入学試験の成績が、その後の学業成績の指標の一つとなることを意味している。推薦入学の場合も、このような指標を確立することが必要であろう。

(3) その他の関係ならびに相関関係についての詳細な議論は改めて報告するが、一例として1982年入学の試験グループについてのデータの一部を第7表に示す。学生数は111名、1%有

第3表 クラス別(全員)成績記録(平均値)

入学年度	クラス	学生数	HSR	HSRE	ENTR	3-EB	3-F	3-S	3-EE	AVFS	S/F	WAVFS	ABSE
1977	A	41	3.4			43.4	52.5	62.4		57.5	1.23	58.5	3.0
	B	43	3.5			44.3	53.0	63.7		58.4	1.25	59.4	3.4
	C	48	3.6			43.0	50.1	64.8		57.4	1.35	58.9	3.8
	D	44	3.4			41.2	46.9	59.7		53.3	1.34	54.6	3.5
1978	A	51	3.0			44.8	56.9	62.6		59.8	1.13	60.3	2.5
	B	53	3.5			45.4	63.2	66.5		64.9	1.12	65.2	2.8
	C	50	3.3			44.7	65.0	67.3		66.1	1.04	66.4	2.2
	D	47	3.6			47.5	68.2	66.0		67.1	0.99	66.9	2.6
1979	A	55	3.5	3.1		48.2	45.7	65.4		55.6	1.63	57.5	2.7
	B	55	3.5	3.1		49.2	47.1	65.0		56.1	1.60	57.8	2.9
	C	49	3.5	3.2		52.8	43.6	71.0		57.3	2.00	60.0	3.3
	D	56	3.6	3.3		51.8	47.6	67.5		57.5	1.66	59.5	3.7
1980	A	56	3.5	3.2		44.5	42.9	65.4		54.2	1.72	56.4	1.9
	B	55	3.5	3.2		50.6	45.1	68.2		56.6	1.71	58.9	2.4
	C	58	3.6	3.4		48.9	43.2	68.3		55.7	1.76	58.3	2.1
	D	51	3.5	3.3		51.4	48.4	73.1		60.7	1.67	63.2	1.5
1981	A	54	3.6	3.3		43.8	56.4	56.3		56.4	1.09	56.3	1.9
	B	50	3.6	3.3		46.7	56.4	48.4		52.4	0.93	51.6	2.9
	C	52	3.5	3.2		49.6	55.8	58.8		57.3	1.16	57.6	2.3
	D	56	3.6	3.3		47.3	58.7	47.6		53.1	0.92	52.0	2.1
1982	A	51	3.6	3.3		46.2	58.5	66.2	60.3	62.3	1.25	63.1	2.5
	B	54	3.6	3.4		43.6	54.6	58.7	64.3	56.7	1.27	57.1	3.3
	C	51	3.6	3.4		46.0	50.7	59.8	57.9	55.2	1.30	56.2	2.6
	D	50	3.6	3.3		42.4	58.9	70.9	60.3	64.9	1.30	66.1	2.2

意水準で相関があるといえる相関係数の最低値は0.2434である。また欠席数(ABSE)と進歩率(S/F)の関係は負の相関を示すはずである。1%有意水準で相関関係があると言えるのは、ENTR vs. 3-EB, ENTR vs. 3-S, ENTR vs. WAVFS, 3-EB vs. WAVFS である。ABSE vs. S/F には負の相関、すなわち、欠席

回数が多い学生は進歩率が低いという傾向がみられる。

6. 結 語

英語の論理性を理解させ、英語の授業を通じて思考力、分析力、創造力を養わせ、日常生活の中で手段としての効用をもつ英語力を身に

第4表 クラス別(試験グループ)成績記録(平均値)

入学 年度	ク ラ ス	学 生 数	HSR	HSRE	ENTR	3-EB	3-F	3-S	3-EE	AVFS	S/F	WAVFS	ABSE
1977	A	25	3.3		50.8	42.6	51.9	68.0		60.0	1.37	61.6	2.7
	B	22	3.4		56.0	49.2	61.9	72.0		67.0	1.18	68.0	3.5
	C	18	3.4		53.4	47.9	58.1	65.6		61.8	1.14	62.6	4.0
	D	17	3.2		53.1	45.1	54.1	63.9		59.0	1.20	60.0	3.5
1978	A	25	3.3		50.0	46.8	61.5	70.1		65.8	1.18	66.7	2.5
	B	30	3.3		50.8	49.4	69.5	69.2		69.4	1.00	69.3	2.9
	C	20	3.4		52.8	47.1	70.7	73.8		72.2	1.05	72.5	1.9
	D	21	3.5		53.1	46.1	73.5	68.6		71.0	0.95	70.6	3.1
1979	A	27	3.3	3.0	66.6	53.4	52.3	68.4		60.3	1.50	61.9	3.1
	B	27	3.4	3.1	66.7	53.3	55.3	70.3		62.8	1.38	64.3	3.0
	C	26	3.4	3.2	65.5	58.7	54.5	75.8		65.2	1.56	67.3	3.7
	D	25	3.4	3.1	68.8	55.1	58.3	72.1		65.2	1.48	66.6	4.0
1980	A	31	3.3	3.0	61.3	49.3	45.5	68.3		56.9	1.69	59.2	2.0
	B	28	3.5	3.1	63.3	55.8	54.7	74.9		64.8	1.45	66.8	1.8
	C	26	3.5	3.3	62.4	53.7	50.5	74.7		62.6	1.63	65.0	1.9
	D	33	3.4	3.1	64.6	54.3	55.2	76.1		65.7	1.48	67.8	1.8
1981	A	33	3.4	3.2	58.4	47.8	63.6	59.6		61.6	0.97	61.2	1.9
	B	31	3.5	3.2	57.4	51.7	62.3	52.7		57.5	0.87	56.5	2.8
	C	38	3.4	3.0	58.5	52.1	62.1	60.6		61.3	1.05	61.2	2.2
	D	27	3.4	3.1	63.7	48.9	60.7	49.9		55.3	0.90	54.2	2.5
1982	A	30	3.4	3.1	64.6	50.3	63.0	69.2	63.5	66.1	1.14	66.7	2.6
	B	29	3.5	3.4	66.9	50.4	59.6	60.7	66.4	60.1	1.11	60.2	2.9
	C	28	3.4	3.2	66.1	51.9	56.7	61.9	67.0	59.3	1.16	59.8	2.5
	D	24	3.4	3.2	64.9	46.2	62.8	70.5	64.0	66.6	1.17	67.4	2.3

つけ、生涯教育への可能性も高めたいという目標にむかって構成したカリキュラムと、実行された教授法のもたらしたものは、数字の上では成功したとは誇り得るものではないが、失敗に帰したともよべないもので、達成途上の状態にある。新らしく身についた学習態度とか興味は測定しがたいが、数値で示し得ない結果として学生達の英語に対する嫌悪感、絶望感の減少

と、関心の高まりをあげたい。研究の当初においては答案や提出物をひきとりにこない学生が多く、甚だしい場合は年間30%をこえて放置された。最近10名以下で、また欠席した時間の配布物を取りにくる学生が多くなった。予習率が第1回の調査で47%を示したクラスもある。先輩からの情報が浸透したためか readiness もよく、授業の流れができるのも早くはなってい

第5表 クラス別(推薦グループ)成績記録(平均値)

入学年度	クラス	学生数	HSR	HSRE	ENTR	3-EB	3-F	3-S	3-EE	AVFS	S/F	WAVFS	ABSE
1977	A	16	3.5			44.5	53.4	53.8		53.6	1.01	53.6	3.5
	B	21	3.6			38.2	43.7	55.0		49.3	1.33	50.5	3.4
	C	30	3.7			39.9	45.3	64.3		54.8	1.48	56.7	3.6
	D	27	3.6			38.7	42.4	57.0		49.7	1.42	51.2	3.6
1978	A	26	3.7			42.8	52.4	55.5		53.9	1.08	54.2	2.6
	B	23	3.7			39.9	54.9	63.0		59.0	1.28	59.8	2.7
	C	30	3.6			43.2	61.2	63.0		62.1	1.03	62.3	2.4
	D	26	3.8			48.9	63.9	63.8		63.9	1.03	63.9	2.3
1979	A	28	3.6	3.3		42.9	39.3	62.6		51.0	1.76	53.3	2.3
	B	28	3.6	3.1		45.3	39.2	59.9		49.6	1.81	51.6	2.9
	C	23	3.5	3.2		45.1	31.1	65.6		48.3	2.49	51.8	2.9
	D	31	3.7	3.5		49.3	38.9	63.8		51.4	1.80	53.8	3.4
1980	A	25	3.9	3.6		38.3	39.7	61.8		50.8	1.76	53.0	1.8
	B	27	3.5	3.3		45.0	35.1	61.3		48.2	1.97	50.8	2.9
	C	32	3.6	3.4		45.0	37.3	63.1		50.2	1.86	52.7	2.3
	D	18	3.7	3.5		46.0	35.8	67.7		51.7	2.03	54.9	1.1
1981	A	21	3.9	3.3		37.8	45.1	51.1		48.1	1.27	48.7	1.9
	B	19	3.7	3.4		37.6	46.9	41.4		44.1	1.04	43.6	3.2
	C	14	3.8	3.7		42.9	38.9	54.2		46.5	1.46	48.1	2.7
	D	29	3.8	3.5		45.9	56.8	45.4		51.1	0.94	50.0	1.8
1982	A	21	3.8	3.5		40.3	52.0	61.8	55.7	56.9	1.41	57.9	2.4
	B	25	3.7	3.5		35.8	48.8	56.5	61.8	52.6	1.45	53.4	3.8
	C	23	3.9	3.6		38.9	43.3	57.3	47.7	50.3	1.47	51.7	2.7
	D	26	3.9	3.3		39.0	55.3	71.2	56.8	63.3	1.42	64.9	2.2

るが、学習に熱心であるとは言いがたいものがある。年間たえまなく行うテストの採点と添削は時間的に大きな負担であるが一人一人の成長を見守る楽しさと、それに貢献していることを知る喜びで相殺されるものである。

さまざまな智識や考え方を知り、学習への興味と関心をもたせるような教材を選定し、それらを順序よく組み立て、システムティックに内

容を豊かに、高度化していくことが最も重い負担であった。このことに関しては最近のコピーや、印刷の機械の発達がなければ本研究は実行不可能であったと考えている。

再履習の学生を加えて70名のクラスもいくつかあったが、クラスの大きさよりも問題なのは学生自体であった。能力の巾の広さもさることながら、最も困難を感じたのは学生達の中に知

第6表 試験入学グループの入学試験成績(ENTR)と第3学年成績(WAVFS)の相関係数

入学年度	学生数	相関係数	1%有意水準における基準値
1977	82	0.5760	0.2828
1978	96	0.4423	0.2616
1979	105	0.2822	0.2502
1980	118	0.5403	0.2361
1981	129	0.5038	0.2259
1982	111	0.3596	0.2434

ているかどうかというだけの問題である。社会が大学を評価するに際しその卒業生の評価によって行うことを考慮すれば、慎重でなければならない。

この授業で、従来の学力をとりもどした学生達と、学力はいまだ低くても、以前にはできなかったことができるようになった進歩率の高い学生達に比べて、期待される進歩率を示さなかったのは、もともとかなりの成績で入学してき

第7表 1982年試験入学グループの諸関係

関 係	回 帰 直 線	相関係数*1
HSR vs. ENTR	$ENTR = 52.94 + 3.71 HSR$	0.1782
HSRE vs. ENTR	$ENTR = 57.59 + 2.51 HSRE$	0.2123
ENTR vs. 3-EB	$3-EB = 16.77 + 0.50 ENTR$	0.3430
ENTR vs. 3-F	$3-F = 42.34 + 0.28 ENTR$	0.1359
ENTR vs. 3-S	$3-S = 7.06 + 0.89 ENTR$	0.3901
ENTR vs. WAVFS	$WAVFS = 21.18 + 0.64 ENTR$	0.3596
ENTR vs. 3-EE	$3-EE = 38.34 + 0.41 ENTR$	0.3226
HSR vs. WAVFS	$WAVFS = 41.63 + 6.37 HSR$	0.1708
HSRE vs. WAVFS	$WAVFS = 52.88 + 3.28 HSRE$	0.1551
3-EB vs. WAVFS	$WAVFS = 37.32 + 0.52 3-EB$	0.4300
3-EE vs. WAVFS	$WAVFS = 33.69 + 0.46 3-EE$	0.3325
ABSE vs. S/F*2	$S/F = 1.31 - 0.07 ABSE$	-0.3081

*1 学生数111名、1%有意水準で相関があるといえる値は0.2434以上である。ただし、3-EEが関与するものについては、学生数109名、1%有意水準の基準値は0.2456である。

*2 欠席数と進歩率の関係であるから、負の相関が期待される。

的な欲求や好奇心がなく、困難をこえて何かを頭を使ってやりとげたいという要求を欠くものがあることである。

最も心の負担となったのは、進歩率が著しかったのになほ底辺にある学生に不合格の評価をつけることであった。しかし進歩率でのみ評価すると大学卒として必要な知識と技能を欠いたまま卒業することとなり、そのことの積重ねが長い間には大学自身の評価に反映することを懸念せざるを得ない。このことがかなりの確率で予見される場合でも入学を認めることは、この研究の結果を示すことによって、今後はさけないことの一つである。これは人間の価値などに関する問題ではなく、大学における学業に適し

た学生達である。これは実施した方法と内容がよくできる学生にはchallengingでなかったためであろうと反省している。運動を得意とするものゝ習性からきているかとも思われるが、これらの学生達は、ハードルを超える自信のある時は余分な跳躍をしないという要領で最少限の努力しかしなかったのも考えられる。教授法は学生のレベルやタイプによって異なる結果を示すという例であろう。

この9年間を通じて痛感したことは授業の成否には教師と学生間の物理的、心理的距離が大きく影響するという事である。Guidanceやcounselingが重要視する、よきrapportは授業の前提として必要であると思われる。

カリキュラムや教授法はそれぞれの大学のもつ特質や風土、その大学の文化とも言うべきものに適合しつつ、教育成果をあげるべきものである。体育大学にはそれ独得のしきたり、雰囲気、価値観、入学の基準その他が存在し、その力は教師ばかりでなく学生をも制約し、ある場合は拘束ともよび得るような影響を及ぼしている。本論文に述べてきた教育手法の試みやその結果は、特殊な環境において行われ得たものであって、一般的に通用できるかどうかについては改めて検討する必要がある。

学生人口の増加に対応するために大学の規模が拡大され、クラスの人数を余りにも多くするとか、大学教育に不適合な者を余りにも多く入学させることは、教師の教授法の選択を制限し、教育意欲を失わせる方向に流れ易い。しかし教師が教授法を自由に選択できるような状態が保たれる場合は、教育効果を上げるために、当然、授業時間における指導の方法を常に分析し、向上させる必要がある。それに対する教師の責任は一層重くなると思われる。教師が忘れてならない言葉は

"The interest with which they come to school is our opportunity,
The interest with which they leave school is our responsibility."
である。

参 考 文 献

- Beard, R., *Teaching and Learning in Higher Education*. Harmondsworth; Penguin, 1972
Bugelski B. R., *The Psychology of Learning Applied to Teaching*, Bobbs-Merrill Co., Inc., New York, 1971
Collier K., *New Dimensions in Higher Education*, Longman, London, 1968
Cronback L. J. and Snow R., *How Can Instruction be Adapted to Individual Differences*, in R. M. Gagnè (Ed) *Learning and Individual Differences*, McMillan, New York, 1967
Davis, A., *Language Testing Symposium*, Oxford Univ. Press, 1968
De Leeuw, Manga & Fric, *Read Better, Read Faster*, Penguin, 1965

- Finocchiaro, M., *Frew Theory to Practice*, 金星堂, 昭和58年
Harris, David P., *Reading Improvement Exercises*, 文理, 1971
Lewis, Norman, *How to Read Better and Faster*, Thomas Y. Crowell, 1958
Milner, P., *Counseling in Education*, Dent. London, 1974
Morrison, A., McInyre, D., *Teachers and Teaching*, Harmondsworth, Penguin, 1969
Rivers Wilga M., Temperleax, Mary S., *A Practical Guide to the Teaching of English as a Second or Foreign Language*, Oxford Univ. Press, 1978
Rowntree D., *Learn How to Study*, Macdonald London, 1970
—, *Educational Technology in Curriculum Development*, Harper & Row, 1974
Stenhouse, L., *Introduction to Curriculum Research and Development*, Heineman, London, 1975
University of London Teaching Methods Unit, *Evaluating Teaching in Higher Education*, University of London, 1975
University of London Teaching Methods Unit, *Improving Teaching in Higher Education*, University of London, 1976
Wales, R. J., Walker, Edward, (Ed) *New Approach to Language Mechanisms*, North-Holland, 1976
West, Michael, *Teaching English in Difficult Circumstances*, Translated by Yoshio Ogawa, 英宝社, 1968
フリーズ, C. C., 山家保訳注 *英語教授法の基礎* 語学教育研究所編日本の英語教育, 過去・現在・未来, 中教出版, 昭和59年
現代の英語教育 1. 英語教育問題の変遷 5. 読む英語 6. 現代の英語教育 9. 教材と教育機器 10. 教室外英語教育 12. 英語研究法
飯野至誠, *英語の教育*, 大修館
入江伸, *入江塾の英語*, 祥伝社, 昭和58年
小川芳男, *話せるだけが英語じゃない*, サイマル出版会, 昭和56年
大沢茂, *最初英語教育法*, 南雲堂
佐藤秀志, *英語教授法の診断*, 開隆堂, 昭和52年
多田房子, *外国語としての英語教授法*, 南雲堂
高梨健吉, 大村喜吉, *日本の英語教育史*, 大修館, 昭和56年
田崎清志, *英語教育理論*, 大修館,

English Teaching in the College of Physical Education

— Sendai College —

Hisako TANAKA

Establishment of curriculum and method of teaching English in the college of physical education was attempted. Planning and practice of procedures and techniques have been carried out in the period of 9 years since 1976. They are described with the results of computer analyses of the students' academic records.

The results show some noticeable points as follows:

1. If the way of teaching fits the students' needs and interest, they are cooperative to the newly tried training and show the tendency to move out from their long cultivated passive attitude in the study of English.
2. Computer analyses clearly show,
 - (i) the records of the entrance examination are favorably related to the achievement in the study of English in the 3rd year, and
 - (ii) judging from the average achievement, students who entered on the recommendation by high school show, with no exception throughout this study, lower achievement than those who entered through the examination.